

AFTERNOON TEA

千葉大学大学院医学研究院自律機能生理学

中村 晃

ベルグソンと生命科学

茨城県立医療大学医科学センターの飯塚眞喜人先生からご紹介頂いたので漫然と先日考えさせられたことを記してみる。

助かる見込みがなく意識状態も悪化し周囲の呼びかけに応答できなくなっている患者さんの御家族からこんな質問を受けた。「もう私たちの声は聞こえていないのでしょうか。」

たぶん私は医師として科学的な意見を求められたのであって、私の個人的な信条や信念に基づいた意見を求められたのではなかった。ただ直観的に、この問いに対して科学的には正しい答えが出来ないであろうと思った。非常に返答に窮した。しかしこれは避けられぬ問いである。生命科学をやっている限り避けて通れない問いでもあり、人として自問せねばならぬ問いでもある。

アンリ・ベルグソン (1859-1941) というフランスの哲学者がいる。失語症の研究や進化論についての研究において有名であるが、彼の著作の中に、私のあやふやな記憶で申し訳ないが、確かこんな内容の言葉があった。

「脳は、注意の器官であり、意識を現実世界につなぎとめる作用をしている。脳は現実世界に生命が適応するべく効率よく行動の選択をするために非常に分化を遂げた器官であり、その高度な分化によって高度な注意力がヒトに備わった。ならば中枢神経系が未分化未発達の生命においても、例えば脳のないアメーバにおいてさえも、ごく微かな意識の萌芽のようなものがあるかもしれない。」

なるほど「アメーバには脳どころか神経系さえないのだから意識なんてあるべくもない」というロジックは科学的に誤りである。そうすると、脳の機能が低下しているゆえに外部との応答ができない状態にある患者さんは、現実世界に対する適応能力がないだけで、意識はどこかにあるのかもしれない。死とともに魂も消滅するという推論の根拠は肉体の消滅という事実にはかない。

現代の思想的偶像の一つに生命科学がある。一般に、実験的事実とそこから類推される仮説との間には人為的解釈が介在するが、偶像の核には、地味な実験的事実よりも、非科学的かもしれぬ人為的解釈と仮説の方が居座りやすい。例えばデカルトが人間機械論という説を唱えたことになっているが事実ではない。彼は自分の発見の上にそのような嘘の学問体系を将来の人間がたてるであろうことを予見していた。「困難は分割せよ」と彼は言ったが、分割されたものが分割される前のものとは質的には異なり得るという警告を後に続く科学者は聞いていなかった。かくして現代の生命科学の実験的事実のうえにもまた何かしら偶像が造られるであろう。「脳死の患者さんは痛みを感じないのだろうか」と医学部の学生に聞くと、「感じません」と無邪気に返答してくる者が殆ど毎年必ずいる。ベルグソンは、科学の進歩のためには実験的事実の蓄積による仮説の検証が重要であるとも述べているが、その著作は正しい人為的解釈の体现であったと言ってよい。生理学に求められるものも同じであろう。示さねばならないのは正しい推論だけではなく、正しく推論することの困難であるかもしれない。